

言語政策と民族語

—ヘブライ語とイディッシュ語の場合—

石田基広

Language Politics and National Language

Motohiro ISHIDA

1

言語もまた生成し、そして死滅する。その多くには文字もなく、したがって文献も残されておらず、我々はこれらを間接的な資料から知りうるに過ぎない。他方で文字体系が整備され、豊富な文献を残しながら、現在では誰にも話されていない言語もある。これらの言語は一般に死語と呼ばれている。

ところで言語が死滅するとはどういうことなのか。たとえば旧約聖書の言語であるヘブライ語は、紀元後135年にユダヤ人がエルサレムを追われて以来(バル・コフバのローマ軍に対する反乱失敗)、話し言葉としてはほとんど使われてこなかった。¹ このため死語と呼ばれてきた。だが他方でヘブライ語は書き

1 小論ではヘブライ語史、イディッシュ語史、さらにユダヤ史一般に関して、下記の図書を参考にしている。

H・H・ベンサソン (1978) 『ユダヤ民族史』全6巻、六興出版。

キリスト聖書塾編 (1984) 『現代ヘブライ語辞典』、キリスト聖書塾。

Weinreich, Max (1973), *History of the Yiddish Language*, Chicago, Chicago University Press. [translated by Shlomo Nobel from *Di geshikhte fun der yiddisher sprachh.*]

Saenz-Badillos, Angel (1993), *A History of the Hebrew Language*, Cambridge, Cambridge University Press. [translated by John Elwolde from *Historia de la Lengua Hebraea* 1988.]

言葉として、宗教文献だけでなく、時には会計の帳簿などにも利用されてきた。また出身地域の異なるユダヤ人の間では *lingua franca* として発話されることもあった。ただヘブライ語を母語とする人間が（ほとんど）いなかったに過ぎない。（19世紀にユダヤ人医師 Zamenhof によって作り上げられた 에스ペラント語は、それを母語とする「集団」のいない言語の例である。²⁾

ヘブライ語の場合、死語となった後もその言語構造は変化しつづけた。それも音韻の体系にである。いまや口語としてはほとんど用いられなくなったヘブライ語に大きく二つの「方言」が生じたのもこの時代であった。

ところでヘブライ語を母語とする集団がいなかったとすれば、「ヘブライの民」であるユダヤ人の母語は何であったのか。ローマ軍による破壊によって最終的にイスラエルの地を追われた彼らは、ヨーロッパ、アジア各地へと離散していったが、世代とともに移住先の言語を吸収していった。ただし彼らはヘブライ語を捨て去らなかった。近代にいたるまで彼らの日常生活のすべてはユダヤ教の厳格な戒律に規定されており、そしてヘブライ語はその聖なる言語であった。それは宗教文献の言語であるだけではなく、日常生活のさまざまな局面（起床時、あるいは食前食後、あるいは安息日の始まり、などなど）で頻繁に口にされる言語でもあった。およそユダヤ人であればヘブライ語の知識が要求され、またその知識無しにはユダヤ人共同体の構成員とはなりえなかった。このためユダヤ民族は早くから一種の義務教育制度を確立し（ヘデルと呼ばれる小学校である）、無給の聖職者（ラビ）が小さな子供達に厄介なヘブライ語の文法と発音を教えて続けてきたのである（ただし女性に対しては組織的な教育はなされなかった）。ヘブライ語は古典語、聖なる言語でありながら、世俗のユダヤ社会の諸制度や、さらには一般民衆の日常生活に密接に関わってきたという点で、その社会言語学的機能はラテン語とはまったく異なっている。

この言語的伝統の特殊性ゆえに、ユダヤ人の間では現地の民衆とは異なる言語運用のパターンが生まれ、時にはその日常語の独自性が強調されてきた。「ユダヤ語」と呼ばれた言語がそれで、現地の言語とヘブライ語、さらには他の地域のユダヤ語が混合した言語である。

ちなみに1983年にイスラエルで行われた国勢調査においてなお、かなりの数

2 ウルリッヒ・リンス (1975), 『危険な言語 — 迫害の中の 에스ペラントー』, 岩波新書.

のユダヤ語が日常語として申告されている。³ 例をあげれば、ユダヤ・アラビア語（これはさらに5種類に分類される）、ユダヤ・アラム語（さらに3種類に分類）、そしてジュデズモ（ユダヤ・スペイン語）、イディッシュ語である。このうちジュデズモ（語）とイディッシュ語は、その話者の数、また文化的影響範囲の広さからもっとも有名な言語である（あった）。特にイディッシュ語は第二次世界大戦以前、推定で1100万以上のユダヤ人によって話されていたとされる。当時この数字は世界中のユダヤ人の3分の2にあたった。⁴ またイディッシュ語は、新聞や演劇、文学などの領域で盛んに用いられ、ユダヤ人大衆文化の担い手でもあった。

にもかかわらずユダヤ社会はイディッシュ語をことさらに重要視してはこなかった。近代までの知識人（すなわち聖職者）にとってイディッシュ語は、ディアスポラ（世界離散）の途上にあるユダヤ社会がメシアの到来まで仮に利用している言語に過ぎなかった。また近代以降のユダヤ人啓蒙主義者にとって、イディッシュ語はドイツ語から派生した俗語 Jargon に過ぎず、それはユダヤ人の後進性を象徴し、ユダヤ人差別を助長するがゆえに直ちに根絶されるべき言語であった。さらにヨーロッパで民族主義の勢いが盛んになると、イディッシュ語をユダヤ人の「民族語」とする主張が登場する一方で、ユダヤ民族語はヘブライ語のみであるとするシオニストたちによって、やはりイディッシュ語はその存在意義を否定されてきた。特に20世紀前半はイディッシュ語とヘブライ語の間で「言語戦争」とも呼ばれる対立が続いた時代であった。この論争は、どちらが現代のユダヤ人の民族語たるべきかをめぐる争いであった。本論の目的は、この論争の背景とその結果を社会言語学的観点から分析することにある。

この言語戦争の結末を先取りすれば、ヘブライ語が勝者となり、イディッシュ語はその後急速に衰退してしまった。その原因は、まず何よりもショアー（ホロコースト）に求められるであろう。ナチスドイツは、イディッシュ語の話手とその生活環境を徹底的に破壊してしまった。またかつてイディッシュ語の話者が集中して暮らしていたロシアは、共産国家ソビエトとして当初はイディッシュ語に好意的であった。だが戦後スターリン政権下で反動が始まり、ソビエトに残ったユダヤ人達は凄惨な迫害を受け、特にイディッシュ語で活動

3 Spolsky, Bernard & Shohamy, Elana (1999), *The Languages of Israel: Policy, Ideology and Practice*, Clevedon, Multilingual Matters LTD, p. 3-4.

4 数値については Encyclopaedia Judaica (Jerusalem, Keter)を参照した。

をするユダヤ系知識人は徹底的に肅清されてしまった。ヒトラーが着手したユダヤ人問題の「最終的解決」を、スターリンが完了させたといわれるゆえんである。

第二次世界大戦後イディッシュ語に代わってユダヤ人の日常語となったのは、英語、フランス語、スペイン語やロシア語など移住先の言語であった。そして建国されたユダヤ人国家イスラエルではヘブライ語が公用語として宣言され、多くのユダヤ人の日常語となるのである（そしてイディッシュ語はあからさまに排除されてきた）。無論そのヘブライ語は旧約聖書のヘブライ語そのままではない。旧約聖書には明らかに現代の日常生活に必要な語彙と表現が欠けている。19世紀末以来、一部のユダヤ人たちの間でヘブライ語を現代化させようとする運動が起こり、彼らの絶え間ない努力によって、かつての聖なる言語は現代の生活に必要な十分な表現力を備えた言語に生まれ変わったのである。⁵

だが仮にシヨアーが起こらなかったとして、イディッシュ語はユダヤ人の民族語としての地位を確立しえたであろうか？今となつては意味の無い間ではあるが、しかし19世紀から20世紀のはじめにかけて二つの言語がその覇権を争った過程は、言語と民族の関係、あるいは言語と社会、国家との関係を考察する上で今なお参考とすべき資料であろう。

前置きが長くなったが、以下小論ではイディッシュ語とヘブライ語の関係、またイディッシュ語がついにユダヤ民族語としての地位を確立しなかった背景について、社会言語学的考察を進めたい。

2

はじめに19世紀以前のユダヤ社会におけるヘブライ語とイディッシュ語の関係について分析する。

社会言語学ではある社会内に同一言語の二つの変種が共存する場合、その機能に応じて一方を高い変種(H)、他方を低い変種(L)と分類する手法がある。

5 一般にヘブライ語の復活は19世紀末のヘブライ語学者 Eliezer Ben-Jehuda の超人的な努力に帰せられている。だが Ben-Jehuda の功績は過大評価されすぎている。彼の活動以前、また彼と同時代に、彼とは別にヘブライ語を日常語として用いようとしたユダヤ人グループの功績が認められなければならない。また話し言葉としてのヘブライ語は、実際には完全に死に絶えていたわけではなかったのである。Spolsky & Shohamy, p. 14.

たとえば Ch. Ferguson は、H はいわゆる標準語であり、書き言葉や公の会合などで採用される変種であるのに対して、L は方言として私的な狭い集団内で使われる変種であると述べた。⁶ J. Fishmann は HL の概念をさらに拡大して、二つのまったく異なる言語が同一社会内でそれぞれ機能的に異なった役割を与えられている状況にも当てはめている。つまりヘブライ語とイディッシュ語のように系統の異なる言語が並存して用いられてきたユダヤ人社会である。

確かにユダヤ社会内部 (intragroup) では、ヘブライ語は聖なる言語であり、また社会諸制度の記録に用いられる言語 (H) であったのに対し、イディッシュ語は家族や友人との間の私的な領域で話されたり書かれたりする言語 (L) であった。無論、先に述べたようにヘブライ語で時には会話も交わされたが、それは例外的な現象である (ヘブライ語の *lingua franca* としての機能と、その後の発展を考察する場合には重要であるが)。他方イディッシュ語には中世末期から民衆本の伝統がある。その対象は不特定多数であったから、その書き言葉が私的な言葉とはいえない。だが本質的にイディッシュ語の文学とヘブライ語のそれは、その機能をまったく異にしていた。イディッシュ語文学のテーマは世俗の物語であることを要求され、ヘブライ語文学の領域を侵犯するのはタブーであった。唯一の例外は聖書や祈祷書の翻訳、あるいは宗教文献の解説や注釈書、暦など、ヘブライ語を十分に解しない女性や子供を対象とした文献であった。⁷

この文学的機能を通してイディッシュ語は、ヘブライ語を教育するための手段、あるいは日常の説教に用いられる言語として、また周囲の非ユダヤ社会との関係にあってはユダヤ人としての独自性を明らかにする要素として、ユダヤ社会に欠かせない言語であると認められはじめていた。ただしこの場合もイディッシュ語それ自体が尊いわけではなかった。イディッシュ語が一般民衆に

6 ウルリヒ・アモン(1992), 『言語とその地位』, 三元社, p.202. [U. Ammon (1987), "Funktionale Typen/Statustypen von Sprachsystem", *Sociolinguistics : An International Handbook of the Science of Language and Society*.]

ブリギッテ・シュリーベン＝ランゲ (1990), 『社会言語学の方法』, 三元社, p. 52. [B. Schlieben-Lange (1978), *Soziolinguistik*.]

7 近世までのイディッシュ文学の特徴に関する最近の研究、また書誌を参考にするには次の書が最適である。

Baumgarten, Jean (1993), *Introduction à la littérature Yiddish ancienne*, Paris, Les Editions du Cerf.

ヘブライ語とその宗教伝統を仲介し、同時にユダヤ人としてのアイデンティティーを保証する機能を制度的に確立した点で、他のユダヤ語と比べて際立っていたに過ぎず、ヘブライ語と同等のステータスをえたわけでは決してなかった。

いずれにせよ、ヘブライ語とイディッシュ語は同一社会内において互いに異なるステータスと機能を与えられてきたことが分かる。

さらにヘブライ語とイディッシュ語の関係を考察する場合、ユダヤ社会が隣接する地域社会 (intergroup) の言語、つまりはドイツ語やロシア語、ポーランド語など第三の言語の存在も無視できない。これらヨーロッパの言語が近代化の進展とともに、イディッシュ語の頭越しに、ユダヤ社会内で「高い変種」の地位をヘブライ語と争うようになるのである。そしてその展開は西と東で大きく異なっていた。

前述のように18世紀になるとユダヤ人の間で啓蒙主義運動が広がっていく。ここではイディッシュ語はユダヤ人がヨーロッパ社会に個人として参入する障壁であり、ユダヤ人はドイツ語などのヨーロッパ語を習得し、ヨーロッパ社会に統合されるべきだと主張された。⁸ 西ヨーロッパではこれ以降ユダヤ社会からイディッシュ語は急速に姿を消した。この場合ユダヤ人はそれまでの高い変種 (ヘブライ語) と低い変種 (イディッシュ語) の両方をドイツ語の変種 (標準語と方言) に替えたのである。

これはユダヤ人啓蒙主義者によるイディッシュ語排斥によるというよりは、ドイツのユダヤ人達がいっせいに同化の道を行っていった自然の結果と考えるべきであろう。西ヨーロッパ社会は、少なくとも公式的には、ユダヤ人の社会参入を許容したのである。⁹ この地域のユダヤ人達はもはやイディッシュ語を十分に理解しなくなっていったにすぎないのである。

一方ヘブライ語は啓蒙主義者にとっても聖なる言語としての位置を保った。ドイツのヘブライ文献学の目覚ましい業績は、啓蒙主義の伝統を引くユダヤ系文献学者達によって達成されたものである。ただ彼らのヘブライ語に対する態度は、その最後の世代に属するユダヤ人学者 Moritz Steinschneider (1816-1907)

8 当時のユダヤ知識人たちはユダヤ人を民族集団とは考えなかった。ドイツのユダヤ系知識人たちは自分達を、ユダヤ教を奉じるドイツ人と考えていた。その意味で彼ら個人がいかにか社会的ステータスを獲得しても、ユダヤ人集団全体はなお社会の低層に押し込められたままであった。

9 同化と解放をめぐる問題については下記の図書の書誌が参考になる。
山下肇 (1995), 『ドイツ・ユダヤ精神史』, 講談社文庫。

の次の発言から明らかであろう。

「われわれにはただもうユダヤ教の遺骸に名誉ある墓を用意するという課題が残されているにすぎない」¹⁰

ユダヤ人啓蒙主義運動の祖 Moses Mendelssohn (1729-1786) はなおヘブライ語で著述していたが、その後続く世代のドイツ系ユダヤ人学者のほとんどは、ヘブライ語に聖典としての地位を保証することによって、安んじてドイツ語などのヨーロッパ諸語による著作に専念できたのである。

20世紀はじめの西ヨーロッパ、特にドイツのユダヤ人にとって、母語はドイツ語以外の何ものでもなく、イディッシュ語はかつての父祖の惨めさと迷信を思い起こさせる不快な言語であり、またヘブライ語は同じく父祖の苦難と栄光を思い起こさせるノスタルジーの対象でしかなかったのである。

これに対して東ヨーロッパとロシアではユダヤ人の言語状況は長らく変化することはなかった。ここではユダヤ人が非ユダヤ社会に参入する機会はほとんどなく、彼らは昔ながらのシュテトル（ユダヤ人街）に閉じこもって暮らしており、ドイツのユダヤ社会からは完全に消え去ってしまった伝統が今なお堅持されていたからである。ヘブライ語とイディッシュ語はかつてのようにその機能を互いに分かち合っていた。ただしハシディズムと呼ばれる神秘主義的傾向をもつセクトが東欧のユダヤ社会で多数派を形成するにつれて、イディッシュ語もまたユダヤ人の民族性を内包した言語とみなす雰囲気は芽生えはじめていた。ハシディズムはヘブライ語聖典の学問的研究より、民衆の歌や踊り、伝説こそ神の本質に近づくための尊い手段であると主張し、イディッシュ語に単なる伝達以上の価値を認めたからである。また東欧の非ユダヤ人言語であるポーランド語やロシア語はイディッシュ語とは構造的に異なる言語であったため、ドイツにおけるイディッシュ語のように、ドイツ語と比較されて俗語と貶められることもなかった。むしろ啓蒙主義と進歩を象徴するドイツ語に極めて近い言語として、近代化の遅れていたスラブ語圏の諸言語より優位にあったと

10 Scholem, Gershom (1981), *Wissenschaft vom Judentum einst und jetzt*. In: *Judaica 1*, Frankfurt am Main, Suhrkamp, p. 147-164, here p. 153.

11 本論の筋とは関係ないが、ナチスドイツが東欧やロシアへ侵攻した際、スラブ圏の反ユダヤ主義に悩まされていたユダヤ人たちは、ゲーテやシラーを生んだドイツ人が野蛮な迫害をするわけがないとして、ドイツ兵を歓迎したといわれる。

さえいえる。¹¹

従ってドイツの啓蒙主義者の影響を受けた東欧のマスキリーム（ヘブライ語で啓蒙主義者）が、ドイツとは異なる展開を見せたのは当然であった。彼らはイディッシュ語に対する態度を修正しはじめるのである。この地域でのマスキリームの攻撃の対象は、イディッシュ語であるよりは、ハシディズムであった。マスキリームはハシディズムを迷信や因習にとらわれた非近代的セクトと断罪し、ユダヤ人一般民衆をハシディズムのくびきから解放しようとして試みた。ところでハシディズムに対抗する勢力としては、早くからミトナグディーム（対立するもの達）と呼ばれる集団がいた。これはユダヤ教正統派に属し、ヘブライ語による研究活動を重視する運動であった（その意味で彼らもまたエリート集団でもあった）。従って彼らの言語活動、たとえばハシディズムに対する批判活動はヘブライ語でなされていた。

この言語的伝統は東欧のマスキリームに影響を与えたはずである。実際、ハシディズムに対抗する勢力として、マスキリームもまたヘブライ語をその言語活動の手段に選んだのである。またミトナグディームとは異なり、マスキリームは世俗の学問や思想をヘブライ語で書き表したから、彼らの活動を通してヘブライ語には新しい表現形式、語彙が与えられ、ヘブライ語そのものの近代化が始まったとされる。¹² ただし彼らはヘブライ語を民衆啓蒙の手段として用いたが、将来的にユダヤ人はドイツ語、またロシア語やポーランド語を日常語にしなければならないと考えていた。この点でドイツの啓蒙主義者と立場は変わらなかった。ただ一般民衆にメッセージを伝えるためには、マスキリームもまたハシディズムと同様、イディッシュ語に頼るほかなかったのである。

いずれにせよ東欧・ロシアで、ヘブライ語とイディッシュ語は宗教的伝統から離れ、啓蒙思想を伝える手段として利用され始めたのである。たとえば Mendl Lefin (1749-1826) はマスキリームとしてイディッシュ語で著作活動を行った初期の思想家である。¹³ しかし言語変種のステータスが変動するとき、それはまたそれぞれの話者の社会的ステータスを動揺させる。それゆえ Lefin

12 特に Mendl Lefin は、それまでのヘブライ語の修飾語法の伝統を離れ、世俗の学問分野を表現するのにふさわしいヘブライ語文体を作り上げたと言われる。

Fishmann (1991), p. 42.

13 Goldsmith, Emanule S. (1976), *Architects of Yiddishism at the Beginning of the Twentieth Century: A Study in Jewish Cultural History*, Madison, Fairleigh Dickinson University Press, p. 38.

のイディッシュ語による著作活動はなお同時代のマスキリーム、特にヘブライ語の文筆家達を刺激し、多くの批判を招いている。だがイディッシュ語による啓蒙活動は着実に浸透していった。

要するにドイツではイディッシュ語がほぼ消滅し、ユダヤ社会には（ドイツ語による）新しい社会言語学的枠組みが形成されたのに対して、東欧とロシアのユダヤ社会では、これまで固定化されていた言語（ヘブライ語とイディッシュ語）の機能区分に変動が現れはじめたのである。この傾向が、やがて民族主義、社会主義、シオニズム、そして両世界大戦を通して、ユダヤ人の言語状況に大きな変化をもたらすのである。

3

20世紀にはいると東欧のマスキリームのイディッシュ語に対する見解に変化が見られはじめる。すなわちイディッシュ語を単なる伝達の道具としてだけではなく、ユダヤ民族文化の象徴と考える傾向が強まったのである。無論これは同時代のヨーロッパに広まった民族主義運動の影響を受けたものである。民族主義においては、言語の差異が民族単位を明らかにする重要な指標のひとつとなる。ユダヤ民族の場合はヘブライ語であるか、あるいはその地域のユダヤ語である。ただし民族の独自性の定義ではさらに地域の共有性も重要な要素であった。¹⁴ その場合特定の土地に縛られていないヘブライ語は余りにコスモポリタンな言語であった（この頃からユダヤ人はある場合はコスモポリタンと非難され、また別の機会には民族主義者と非難されていくのだが）。後にシオニズムはヘブライ語をユダヤ人の民族語であると規定するが、その場合ユダヤ民族はパレスティナという地域に再び国家を持つことが想定されている。

イディッシュ語の権利主張はさらに先鋭化し、イディッシュ語は現代のユダヤ民族とその文化を生成せしめた源泉であり、唯一のユダヤ民族語と呼ばれてしかるべきであるとの主張が登場した。いわゆる「イディッシュ主義」である（ここではラディノを話すスペイン系ユダヤ人など、地中海周辺やアジアのユダヤ社会とその言語文化については意図的に無視されている）。Yiddishism と

14 田中克彦(1991),『言語からみた民族と国家』,岩波同時代ライブラリー, p. 110.
「共有する地域」とはまた「国境」といっても良い。シュリーベン=ランゲ(1990),
p. 132.

は、この運動を代表する Nathan Birnbaum (1864-1936) の造語である。¹⁵

すでに述べたように、かつてユダヤ社会内部においてヘブライ語とイディッシュ語は互いの社会的機能を分散し、それぞれの内部で完結していた。これに対してイディッシュ主義は、これまでもっぱらヘブライ語が用いられてきた領域、たとえば共同体の公文書、図書刊行物などの分野においてもイディッシュ語の利用を促進しようと試みるものであった。また他方では同時代の別の言語、たとえばドイツ語やロシア語などの言語と同等の権利をイディッシュ語に認めるよう訴えもした。これは具体的には国の公教育機関でイディッシュ語を正式に採用することや、国家による承認（たとえば国勢調査の「母語」の項目にイディッシュ語を加えること）を政府に要求する活動となって現れた。

社会言語学的にいえば、高次元のコミュニケーション（演説や書き言葉）に堪えうるよう語彙や文法、また正書法（標準語）を整備することを Corpus Planning と呼ぶ。これに対してその言語の社会的ステータスを制度的に保証させようとするのは Status Planning である。¹⁶ イディッシュ語は話し言葉としては標準形がなく、また書き言葉としてはかつての民衆本の伝統に標準化の傾向が認められはしたものの、整備されたものではまったくなかった。¹⁷ イディッシュ主義者達はこうした言語構造の改善を通して、イディッシュ語のユダヤ民族語としての地位を高めようとしたのである。

狭いユダヤ社会内部でイディッシュ語がその機能役割を拡大するのであれば、当然ながらヘブライ語はこれまでの機能を縮小するか、あるいはイディッシュ語の膨張に対抗するようになる。事実そうだった。ヘブライ語を日常語として復活させようとする運動である。つまりヘブライ語はその H 機能だけでなく、これまでイディッシュ語が果たしてきた L 機能も果たそうとしはじめ

15 Goldsmith, p. 109. ただし Birnbaum 自身の母語はドイツ語であった。

ちなみにシオニズムという言葉を作り出したのも彼であった。Fishman (1991), p. 372. また Birnbaum については他に次を参照した。

Fishman, Joshua A (1987), *Ideology, Society & Language: the Odessey of Nathan Birnbaum*, Ann Arbor, Karoma Publishing.

16 アモン (1992), p. 160.

17 中世イディッシュ語標準については下記47-53章を参照。

Timm, Erika (1987), *Graphische und phonische Struktur des Westjiddischen unter besonderer Berücksichtigung der Zeit um 1600*, Tübingen, Max Niemeyer.

たのである。これはマスキリームがヘブライ語を世俗の問題と思想を伝える手段として用いたことに端を発するものであったが、シオニズムの誕生によってさらに押し進められることになった。もっとも当初マスキリームはヘブライ語によって啓蒙思想の普及を目指したが、それは過渡期的手段であり、やがてユダヤ人はロシア語やドイツ語を日常語とするのを望んでいた。彼らはヘブライ語にそれまでとは異なる社会言語機能と利用範囲を与えたものの、それを日常の会話にまで拡大することは思いもしなかったであろう。だがシオニズムはそれを目指したのである。

シオニズムは啓蒙主義の展開にもかかわらず、結局ユダヤ人が差別されたままであるのを受け、ユダヤ人は民族として独立し、社会の多数派となる以外に決して「解放」されないと主張する運動であった。たとえば Theodor Herzl(1860-1904) は『ユダヤ人国家』を著し、ユダヤ民族国家の建設を訴え、世界中のユダヤ社会に（当初はネガティブな）センセーションを巻き起こした。初期のシオニスト達の中には新生ユダヤ人国家（それは必ずしもパレスティナに建設されなくても良かったのだが）の公用語はイディッシュ語になるであろうとの考えもあった。オーストリア出身の Herzl 自身はドイツ語を公用語化する考えであったのは良く知られている。

しかしながらシオニズム理論は、やがて文化的シオニズム運動を標榜する Ahad Haam (1856-1927) に代表されるように、ユダヤ民族のディアスポラ（世界離散）とその文化のすべてを否定する方向に向かった。その意味でディアスポラの産物であるイディッシュ語もまた否定の対象であった。またユダヤ民族主義からすれば「異質な」言語であるドイツ語などの非ユダヤ語も論外であった。シオニスト達は、ユダヤ民族語はヘブライ語だけであると考えたのである。そして来るべきユダヤ人国家においてヘブライ語が日常語として復活することを期待し、彼らもまたその言語の整備（Corpus Planning）に精力を注ぐようになるのである。

ここにかつてのイディッシュ語とヘブライ語の機能区分、住み分けは急速に崩れていくのである。それぞれの陣営の間で、互いの支持する言語の Status をめぐって激しい対立が生じた。この対立は、皮肉なことにイディッシュ主義者達が、イディッシュ語の言語ステータスを高める目的で開催した「チェルノビッツ・イディッシュ語会議」(1908 Aug. 8)において顕在化することになる。

4.

「チェルノビッツ・イディッシュ語会議」は Birnbaum らによって企画され、ガリシアで開催された国際会議であった。彼は著名なユダヤ人学者や作家達、また有力なユダヤ人達を招いた言語会議を開催することによって、イディッシュ語を国際的にアピールし、その地位を確立できると考えていた。その目的のため、彼は政治的な対立を明らかにするような抽象的な問題をできるだけ避け、Corpus Planning に関わる問題、すなわちイディッシュ語の語彙の拡大、正書法の確立、そして標準語の整備など、より具体的なプログラムの発案と計画を中心議題と考えていた。しかしながら実際の会議では、Corpus に関わる問題の討議は常に、それとは性質を異にする別の問題の議論へと集約していったのである。すなわちイディッシュ語はユダヤ民族語であるかという Status をめぐる問題である。

この会議の主席者は多岐に及ぶが、実際に発言したのは主に三つのグループである。まずユダヤ人社会主義政党「ブンド」の黨員達がいた。ブンドは、ユダヤ民族主義は階級的対立をあいまいにする主張だと批判していたが、しかしイディッシュ語については、これをプロパガンダの手段として重要視していた。民族主義者であるシオニストは当然ブンドと対立していたが、この頃はイディッシュ語を新生イスラエル国家内で許容するグループもあり、現にパレスティナに移住した住民の間では、ヘブライ語とイディッシュ語がヘゲモニーを争っている状態であった。それゆえシオニスト達の態度はなお統一されていなかった。最後に Birnbaum に代表されるイディッシュ主義者のグループがいた。彼らはイディッシュ語にヘブライ語と同等の地位を与えることを目指した点で改革者であったが、しかしブンドとは異なり民族主義を標榜しつつも、他方でシオニズムのようにディアスポラのユダヤ文化を否定することはなかった。

会議ではイディッシュ語をユダヤ民族語と認めるかどうかで激しい対立が続いた。ブンドのメンバー達はイディッシュ語を民族語 (the national Jewish language) と規定するよう求めた。ブンドは大衆の母語であるイディッシュ語を、東欧やロシアのユダヤ人労働者達を団結させるための手段、また団結の象徴としてアピールしたかったのである。これはイディッシュ語に好意的なシオニストにとっても受け入れがたい定義であった。もともとブンドとシオニズムの間には前述のように埋めがたい溝があった。シオニズムは、ヨーロッパのユダヤ問題はユダヤ民族が大挙してその「故郷」パレスティナに帰還すること

によってのみ解決されると考えていた。一方階級的対立の解消が必然的にユダヤ民族の問題を解消すると主張する社会主義政党ブンドは、シオニズムの領土主義、民族主義に真っ向から反対していた。

二つのグループの間にはさまれる形となった Birnbaum らイディッシュ主義者は、結局 “a national Jewish language” という妥協的な表現によってかろうじて議論を収拾した。この対立とその収拾のため、他の実務的な議論に割かれた時間は非常にわずかなものでしかなく、Corpus Planning に関わる問題は実質的に先送りされ、実際にはその後何も着手されなかった。イディッシュ語の標準化は、この後1925年ベルリンに設立（後にニューヨーク、アルゼンチンに移設）されたイディッシュ語研究所（YIVO）によって、その活動の一部として着手されるのである。

会議で採択された “a national Jewish language” との宣言は、ブンドのメンバーが不満を漏らしたように、イディッシュ語の Status を高めるには余りに弱い表現であった。結局チェルノビッツ会議が失敗し、またイディッシュ語がユダヤ民族語としての地位を確立しえなかった原因はこの宣言に象徴されていると見てよい。確かにチェルノビッツ会議は世界にイディッシュ語をアピールするのに貢献し、実際その後多くのユダヤ知識人たちを刺激し、彼らがイディッシュ語で文化活動するのを促すきっかけとなった。そもそも会議という公的なイベントにイディッシュ語が採用されたこと自体が画期的なことであった。しかしそれ以上のものではなかった。なぜならイディッシュ語による活動は余りに「文化的」であったからである。

ある言語が特定の集団、社会、国家においてその地位を確立するには、先に触れたように Corpus Planning と Status Planning の二つ面からのアプローチが必要とされる。だがそもそも言語を整備し、標準化するためには、それらの努力が社会的に要請される（そして報われる）状況が存在しなければならない。Corpus Planning には Status Planning による後ろ盾が必要なのである。だがそもそも標準化などの整備がされていない言語の場合、その社会的地位を高めようとする風潮は生まれにくい。特に20世紀前後のユダヤ社会では、すでに伝統的に書き言葉の整備されてきたヘブライ語と、同じくやはり標準化の進んでいたドイツ語がすでに言語の H 機能を果たす候補として登場しており、これに比べてイディッシュ語の構造は余りに未整備であり、またその社会的ステータスは余りに低かった。

つまりイディッシュ語をユダヤ民族語として認定するには、何よりもまず Status Planning が必要だったのである。だが実際にはイディッシュ語を支持し

たユダヤ人達は余りにも「文化人」であった。彼らは民族語の制定は、結局政治の問題であるのを認識していなかった。これに対してブンドのメンバー達は「政治家」であったが、しかし彼らは民族主義を否定するグループであり、彼らにとってイディッシュ語はユダヤ人労働者階級を束ねる言語であっても、ユダヤ民族を束ねる言語ではなかったのである。さらにブンドの最終目標、すなわち革命の成就した暁の社会においては、もはやユダヤ人という単位そのものが存在していない筈であった。実際ブンドはその活動を通じてイディッシュ語を積極的に利用しながらも、その言語そのものに何らかの精神的価値を認めようとする考えには常に懐疑的であった。

これとは対照的にヘブライ語は、特にパレスティナに移住したシオニスト達の間でその地位を着実に確立していった。特に象徴的なのが1913年起こったいわゆる「言語戦争」と呼ばれる事件であった。¹⁸ それはドイツの非シオニスト系ユダヤ人組織「ドイツ・ユダヤ人援助協会 (Hilfsverein der deutschen Juden)」が現在「テクニオン」として知られる工科大学をパレスティナに設立する計画を立てたことに端を発する。この団体はドイツに同化したユダヤ人達に設立された援助組織であり、この大学の教育はドイツ語で行うと発表したのである。またパレスティナの社会整備を急ぐシオニストのリーダー達の多くも、自然科学分野の教育に必要な語彙がヘブライ語にはなお欠けているのを認め、とりあえずはドイツ語による教育を容認する姿勢を見せたのであった。ところがこの決定はパレスティナでヘブライ語の教育に従事している教師たちを激昂させ、彼らは全土でストライキを実行したのである。このストライキにはやがて生徒達も加わり、暴動も併発するようになった。結局協会はその最初の方針を撤回するに至るのである。この事件の背景と結果には他の政治的要因が濃厚に働いているが、しかし少なくともヘブライ語がパレスティナにおける唯一のユダヤ語であるのを内外に印象付けることとなった。1920年代のパレスティナでは多くの党派でヘブライ語を唯一の言語と考える思潮が完全に優位になっている。¹⁹

無論、ヘブライ語がパレスティナの地でヘゲモニーを確立するにはまた別の要因も有利に働いた。パレスティナに移住してきたのはイディッシュ語を話すアシュケナーズばかりではなかった。ヨーロッパはもとより、アフリカ、アジ

18 Sachar, Howard M (1996), *A History of Israel from the Rise of Zionism to our Time*, second edition, New York, Alfred A. Knopf Publishing, p. 84.

19 Spolsky & Shohamy, p. 212.

アなど世界各地に暮らしていたユダヤ人達が、それぞれの言語を携えてこの地に渡ってきたのである。ヘブライ語はパレスティナの地において、多様な背景を背負ったユダヤ人同士のコミュニケーション手段となったのであった。

ユダヤ人は大きくアシュケナージとセファルディーに分けられるが、この二つはその宗教儀式や生活様式の点においてかなり異なっている。イディッシュ語はそのうちアシュケナージ独自の文化様式を代表するものであり、また20世紀以降は世俗的な運動に強く関わっていた。このためイディッシュ語は、なお保守的なセファルディーなどのユダヤ人達の反発を招きうる言語であった。シオニストの中には、イディッシュ語をコミュニケーション手段として採用するくらいなら、ドイツ語やフランス語のほうが好ましいと考えるグループさえいたほどである。

それどころかパレスティナにおいてイディッシュ語は迫害の対象にすらなっている。イディッシュ語の教育を行おうとするユダヤ人はテロの対象になり、また1927年にアメリカのイディッシュ語新聞 Der Tog 紙がヘブライ大学にイディッシュ語の講座を設置するために資金の提供を申し出ると、パレスティナのヘブライ主義者達はこれにいっせいに反対し、結局ヘブライ大学はこの申し出を断っているのである。

パレスティナのヘブライ主義者は、ヘブライ語そのものを整備する活動と平行して、それを受け入れる世論を醸し出すための宣伝活動に積極的に従事し、必要であれば暴力をもってして敵対勢力を攻撃したのである。彼らの活動の中心は常に政治的であった。

戦後イディッシュ語の話し手が激減し、また建国されたイスラエルでヘブライ語が公用語として宣言されてなお、ヘブライ語主義者はイディッシュ語を警戒しつつけた。ヘブライ大学にイディッシュ語講座の開設が認められたのは、ようやく1951年のことであった。また1955年にはブンド系の学校がイディッシュ語を非正規科目として開講している。しかしながら政府機関ないし公人がイディッシュ語に寛容な態度を表明したのは1976年のことである。エルサレムで開催された「世界イディッシュ大会」において、時の文部大臣がディアスポラ文化の保護促進の重要性について言及したのが最初であった。またイスラエル政府が公式に（議会で）イディッシュ語を承認するのはさらに遅れて、なんと1996年のことであった。

5

ヘブライ語は勝者になった。しかしながらヘブライ語はユダヤ民族語になったのであろうか。

近代になってユダヤ人の人口移動が始まり、ヨーロッパから世界各地、特にアメリカ大陸にユダヤ人が移住しはじめた。その後イスラエル国家が建設され、そしてホロコーストがヨーロッパのユダヤ世界を崩壊させるまでの間、世界中のユダヤ社会で *lingua franca* として用いられたのはイディッシュ語であった。

しかしながらイディッシュ語がユダヤ社会の主流から消え去ってしまった今日、世界中のユダヤ人の間で *lingua franca* として話されているのは、ユダヤ人国家イスラエルの公用語であるヘブライ語ではない。それは英語である。イスラエルはヘブライ語の他、アラビア語と英語を公用語としている。アラビア語はパレスティナ住民の話す言語であるが、英語が公用語とされているのは、ひとつには建国以前のイギリス統治時代の名残である。がイスラエル政府はイギリス統治から50年以上を経た今日なお、英語教育の拡充・強化を続けている。それは世界のグローバリズム化に伴う必然的な施政であるが、しかしイスラエルの場合それ以上の意味が含まれていることに注目しなければならない。

戦後世界中に散らばったユダヤ人たちは最初にも触れたように移住先の言語に完全に同化して暮らしている。つまり英語、ロシア語、フランス語、スペイン語である。そしてそれらの地域のユダヤ社会は文化的にもほぼ完全に地域社会に同化している。ヘブライ語の教育はもはや選択される機会の少ないオプションに過ぎなくなっているのである。実際これらの地域のユダヤ人は、ごくわずかな単語やフレーズを除けば、ヘブライ語をまったく解さない。このような状況においてコミュニケーション手段となりうるのは、結局のところ英語なのである。イスラエル国内においてすら、移民直後のユダヤ人とのコミュニケーションには英語が主に用いられている（特に英語圏から移住してきたユダヤ人達の中にはヘブライ語をまったく使わないものも多い）。

さらにイスラエルに対する最大の支援国がアメリカであり、そしてアメリカ国内でイスラエルを代表するのがアメリカ系ユダヤ人の諸団体であることも無視できない要因であろう。アメリカ国内のユダヤ人の総数はイスラエルのそれをはるかに超えるのである。

ところでイディッシュ語はこのまま消え去る運命にあるのか。実はイディッシュ語は、現在わずかながらもその話者の数を増やしつつある。ユダヤ教には

超正統派といわれるグループがいる。彼らは真夏でも黒いコートに身を包んだ一種独特の宗教セクトであり、エルサレムとニューヨークにもっとも多く暮らしている。エルサレムでは彼らは聖なる言語であるヘブライ語を日常使うことを拒否し、またニューヨークなどでは周囲の非ユダヤ社会の言語文化への同化を嫌って、今なおイディッシュ語を日常語として用いているのである（ただしヘブライ語や英語とのバイリンガルである）。

またこれとは別に世俗のイディッシュ主義者も増えつつある。彼らは宗教にユダヤ人としてのアイデンティティーを求めるのではなく、自分達のルーツ、先祖の伝統文化全体の継承を目指す。そして現代の世俗ユダヤ文化はイディッシュ語から生まれてきたと考え、これを学び、さらに次の世代へ伝えることを目標としている。この世俗のイディッシュ主義者達は、インターネットなどの現代テクノロジーを利用し、新しいイディッシュ主義の運動形態を模索しつつ、その影響力を徐々に増しているように思える。

ヘブライ語が今や完全に世俗の、中立的な言語としての性格を強めているのに対して、逆にイディッシュ語はユダヤ的性質（Yiddishkeit）をより濃厚にしつつあるのである。

結局、新生ヘブライ語はユダヤ民族語であるのか。あるいはイスラエル語であるのか。ユダヤ社会における言語状況は、今後さらに現代ヘブライ語と英語がそのヘゲモニーを争う展開となるであろうが、その一方でイディッシュ語などのユダヤ語がユダヤ人の民族意識を刺激する要因として、二つの言語の争いに常に干渉していくように思われる。